

天草方言で読む 論語

鶴田 功 意識

春秋時代の思想家孔子とその弟子たちの言行録を天草方言で意識した。

学而第一 1

01-01 子曰。學而時習之。不亦説乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不愠。不亦君子乎。

子曰く、**学**びて時に之を**習**う。亦**説**ばしからずや。朋**有**り、遠方より来たる。亦た**樂**しからずや。人知らずして**愠**おらず、亦た君子ならずや。

先師である孔子が仰った。学んでは折りに触れて復習する。なんと喜ばしいことだろう。同じ道を志す友人が、遠くからひょっこり訪ねてきてくれる。なんと楽しいことだろう。世間の人認めてくれないからといって恨み言を言わない。こういう人をこそ、君子というのだ。

01-02 有子曰。其爲人也孝弟。而好犯上者。鮮矣。不好犯上。而好作亂者。未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者。其爲仁之本與。

有子曰く、其の人と為りや**孝弟**にして、上を犯すを好む者は**鮮**し。上を犯すことを好まずして、乱を作すを好む者は未だ之有らざるなり。君子は本を**務**む。本立ちて道生ず。孝弟なる者は、其れ仁の本**為**るか。

有子先生が仰った。家庭でにや、親にや**孝行**であり、兄にや従順な人物が、世間に出て目上の人に対して思い上がるとる**例**しや滅多な**か**。目上に対して控え目の人が、好んで社会国家の秩序ば乱したちゅう**例**しや絶**対**にな**か**こと。古来、君子は何ごとにでん根本ば大切にし、まずそこに全精力ば傾倒して来らしたも**ん**ばって、そりや、根本さえ把握しとれば、道はおのずから開けて行く**も**んだ。君子が到達した仁ちゅう至**上**の徳も、おそらく孝弟というごたる家庭道德の忠実な実践に**そ**ん根本があ**つ**た**っ**じ**ゃ**か**ら**う**か**。

01-03 子曰。巧言令色。鮮矣仁。

子曰く、**巧言令色**、**鮮**い**か**な**仁**。

先師が仰った。巧みな言葉、媚びるごたる表情や見てくればかり飾**っ**とる者にや、仁の**あ**る者は少**な**か。

01-04 曾子曰。吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。

曾子曰く、**吾日**に**三**たび**吾身**を**省**みる。人の為に謀りて忠ならざる**か**。朋友と交わりて信ならざる**か**。習わざるを伝**う**るか。

曾先生が仰った。私は、毎日、つぎの三つのことば反省するごてし**と**る。その第一は、人**ん**為になろうと思**う**てや**っ**とることに全力ば**尽**くさん**じ**ゃ**つ**た**っ**じ**ゃ**か**ら**う**か**、ということと、その第二は、友人との交**り**で信義に背くことは**な**か**つ**た**ら**う**か**、ということであり、そ

の第三は、自分でまだ実践できるほど身についとらんことば人に伝えとっとじゃなかるか、ということである。

01-05 子曰。道千乗之國。敬事而信。節用而愛人。使民以時。

子曰く、千乗の国を道むるには、事を敬みて信あり、用を節して人を愛し、民を使うに時を以てす。

先師が仰った。千乗の国ば治むる秘訣が三つある。すなわち、国政の一つ一つば真面目に取組んで民の信頼ば得ること、できるだけ国費ば節約して民ば愛すること、そして、民に労役ば課す場合にゃ、農事の妨げにならん季節ば選ぶこと、これである。

01-06 子曰。弟子入則孝。出則弟。謹而信。汎愛衆而親仁。行有餘力。則以學文。

子曰く、弟子、入ては則ち孝、出ては則ち弟、謹みて信あり、汎く衆を愛して仁に親しみ、行いて余力有れば則ち以て文を学べ。

先師が仰った。年少者の修養の道は、家庭にあつては父母に孝養ば尽くし、世間に出ては目上に従順であることが、まず何よりも大切だ。こん根本に出発して万事に言動ば謹み、信義ば守り、進うで広く衆人ば愛し、とりわけ高德のある人に親しむがよか。そして、そうしたことの実践に勤みながら、なお余力があれば、詩書・礼・楽といったごたる学問ば志すべきじゃろう。

01-07 子夏曰。賢賢易色。事父母能竭其力。事君能致其身。與朋友交。言而有信。雖曰未學。吾必謂之學矣。

子夏曰く、賢を賢として色を易え、父母に事えてはよく其の力を竭し、君に事えてよく其の身を致し、朋友と交わり、言いて信有らば、未だ学ばずと曰うと雖も、吾は必ず之を学びたりと謂わん。

子夏が仰った。美人ば慕うかわりに賢者ば慕い、父母に仕えて力のある限りば尽し、君に仕えて一身の安全とか危険も省みんで、朋友と交ってもちよつとしたことばの端にも信義に違ふことがななれば、仮にそんな人が世間のいわゆる無学の人じゃったっちゃ、私は断乎としてそんな人ば学者と呼ぶとに躊躇せんじゃろう。

01-08 子曰。君子不重則不威。學則不固。主忠信。無友不如己者。過則勿憚改。

子曰く、君子重からざれば則ち威あらず。学べば則ち固ならず。忠信を主とし、己に如かざる者を友とすること無かれ。過ちては則ち改むるに憚ること勿れ。

先師が仰った。道に志す人は、つねに言語動作を慎重にせんばいかん。でないとな、外見が軽っぽく見えるだけじゃなく、学ぶこともしっかり身につかん。むろん、忠実と信義とを第一義として一切の言動ば貫くべきだ。安易に自分より知徳の劣った人と交っていい気になつとは禁物である。人間だから過失はあつどばってか、大事なものは、そんな過失を即座に勇敢に改むることだ。

01-09 曾子曰。慎終追遠。民德歸厚矣。

曾子曰く、終りを慎^{つつ}しみ、遠きを追えば、民の徳^{あつ}厚^ききに帰せん。

曾先生が仰った。上に立つ者が父母の葬いば鄭重にして、遠か先祖の祭りば怠らんば、人民もおのずからその徳に同化されて、敦厚な人情風俗が一國ば支配するごてなるもんだ。

01-10 子禽問於子貢曰。夫子至於是邦也。必聞其政。求之與。抑與之與。子貢曰。夫子温良恭儉讓以得之。夫子之求之也。其諸異乎人之求之與。

子禽^{しきん}、子貢^{しこう}に問いて曰く、夫子^{ふうし}の是^{くに}の邦^{いた}に至るや、必^{かなら}ず其^{まつりごと}の政^{まつりごと}を聞く。之を求めたるか、抑^{そもそも}之を与^{しこう}えたるか。子貢曰く、夫子^{ふうし}は温^{しこう}・良^{ふうし}・恭^{きよう}・儉^{きよう}・讓^{きよう}、以て之を得たり。夫子^{これ}の之を求むるや、其れ諸^{こと}人の之を求むると異なるか。

子禽が子貢にたずねた。孔先生は、どこの国に行きなしても、必ずその国の政治向きのことに関係しなさいますばって、そりゃ先生の方からのご希望でそうなつとでしようか、それとも先方から持ちかけてくつとでしようか。子貢がこたえた。先生は、温・良・恭・儉・讓の五つの徳ば身につけておられるので、自然にそがんなるのだと私は思う。むろん、先生ご自身にも政治に関与したかというご希望がなかわけじゃなかばって、その動機はほかん人とは全く違ふとる。先生にとって大事かとは、権力の掌握じゃのうして徳化の実現だ。だけん、先生はどこの国に行かしても、ほかん人達のごて媚びたりへつろうたりして官位ば求むるごたるこたなさらん。ただご自身の徳でもって君主にぶつつかっていきなさつと。そりが相手の心にひびいて、自然に政治向きの相談にまで発展していくのじゃなかるかて思われる。

01-11 子曰。父在觀其志。父沒觀其行。三年無改於父之道。可謂孝矣。

子曰く、父^{いま}在^{こころざし}せば其^みの志^{ぼつ}を觀^{おこなひ}、父^{あらた}沒すれば其^{あらた}の行^{あらた}を觀^{あらた}る。三年父の道^{あらた}を改^{あらた}むること無きは、孝と謂^{あらた}う可^{あらた}し。

先師が仰った。父の在世中はそのお気持ば察して孝養ばつくして、父の死後はその行なわれた跡ば見て、すべてのしきたりば繼承するがよか。こうして三年の間、父のしきたりば改めんで、ひたすら喪に服する人なるば、真の孝子て言われるつどだ。

01-12 有子曰。禮之用。和爲貴。先王之道斯爲美。小大由之。有所不行。知和而和。不以禮節之。亦不可行也。

有子曰く、**礼の用は和を貴しと為す**。先王の道も斯を美と為す。小大之に由るも、行なわれざる所有り。和を知りて和するも、礼を以て之を節せざれば、亦た行^{また}う可^{また}らざるなり。

有先生が仰った。礼は、元来、人間の共同生活に節度を与えるもので、本質的には厳しい性質のものである。ばって、そのはたらきの貴さは、結局のところ、のびのびとした自然

的な調和ば実現するところにある。古聖の道も、やっぱりそがんした調和ば実現したけんこそ美しかったっばって、事の大小ば問わず、何でんかんでん調和一点張りでいこうとすれば、うまいかんことがある。調和が大切で、そりば忘れてはならんばって、礼をもってそれに節度ば加えんば、生活にしまりがなかごてなる。

01-13 有子曰。信近於義。言可復也。恭近於禮。遠恥辱也。因不失其親。亦可宗也。
有子曰く、信、義に近ければ、言、復むべきなり。恭、礼に近ければ、恥辱に遠ざかる。因ること其の親を失わざれば、また宗ぶ可きなり。

有先生が仰った。約束したことが正義に叶うておれば、そん約束どおりに履行できるもんだ。丁寧さが礼にかのうておれば、人に軽んぜらるることなかもんだ。人にたよる時に、たよるべき人物の選定を誤つたらんば、生涯そん人ば尊敬さるるもんだ。

01-14 子曰。君子食無求飽。居無求安。敏於事而慎於言。就有道而正焉。可謂好學也已。
子曰く、君子は食に飽くことを求むる無く、居に安きを求むる無し。事に敏にして言に慎み、有道に就いて正す。学を好むと謂う可きのみ。

先師が仰った。君子は飽食ば求めらっさん。安居ば求めらっさん。仕事は敏速にやるばって、言葉はひかえ目になさる。そして有徳の人について自分の言行の是非ばたずね、過ちば改むることにいつも努力しておんなさる。こがんしたことに精進する人こそが、真に学問ば好む人というべきだ。

01-15 子貢曰。貧而無諂。富而無驕。何如。子曰。可也。未若貧而樂。富而好禮者也。
子貢曰。詩云。如切如磋。如琢如磨。其斯之謂與。子曰。賜也。始可與言詩已矣。告諸往而知來者也。
子貢曰く、貧しくして諂うこと無く、富みて驕ること無きは、何如。子曰く、可なり。未だ貧しくして楽しみ、富みて礼を好む者に若かざるなり。子貢曰く、詩に云う、「切するが如く、磋するが如く、琢するが如く、磨するが如し」と。其れ斯を之れ謂うか。子曰く、賜や、始めて与に詩を言う可きのみ。諸に往を告げて、来を知る者なり。

子貢が先師にたずねた。「貧しかったちゃ人にへつらわず、裕福でも奢りたかぶらん…こういう生き方は、どがんしょうか？」

先生がおっしゃった。「よかばってまだ十分ではなか。貧しくても道義を楽しみ、裕福でも礼を好むなら、もっとよか」

子貢が言った。『詩経』に「切するがごとく、磋するがごとく、琢するがごとく、磨するがごとし」と、学問修行に打ち込む様が語られていますが、まさにこういうことなのでしょうね」

先生がおっしゃった。「子貢よ。私は初めて詩を共に論じられる相手を得たよ。お前は少し話すと、話の後半までもうわかってしまうのだからなあ」

01-16 子曰。不患人之不己知。患不知人也。

子曰く、人の己を知らざるを患えず、人を知らざるを患うるなり。

先師が仰った。人が自分ば知ってくれんということはいっちょん心配なことではなか。自分が人ば知らんということが心配なんだ。

為政第二

02-01 子曰。爲政以德。譬如北辰居其所。而衆星共之。

子曰く、政を為すに徳を以てす。譬えば北辰の其の所に居て、衆星の之に共うが如し。

先師である孔子が仰った。徳によって政治ば行なえば、民は心ば寄せて従やす。そりゃちょうど北極星がその軸において、諸々の星がそりば中心に一糸みだれでにゃ公転するごたるふうですたい。

02-02 子曰。詩三百。一言以蔽之。曰思無邪。

子曰く、詩三百、一言以て之を蔽えば、曰く、思い邪無し。

先師が仰った。詩経にはおよそ三百篇の詩があるばって、その全体ば貫く精神は『思い邪なし』の一句につきる

02-03 子曰。道之以政。齊之以刑。民免而無恥。道之以徳。齊之以禮。有恥且格。

子曰く、之を道びくに政を以てし、之を齊うるに刑を以てすれば、民免れて恥無し。之を道びくに徳を以てし、之を齊うるに礼を以てすれば、恥有りて且つ格し。

先師が仰った。法律制度だけで民ば導き、刑罰だけで秩序ば維持しゅうとすれば、民はただそがんした法網ばくぐることだけに心ば使い、幸にして免れしゃかすれば、そっでいっちょん恥じるころはなか。これに反して、徳でもって民ば導き、礼によって秩序ば保つごてすれば、民は恥ば知り、わあがから進んで善ば行なうごてなるもんである。

02-04 子曰。吾十有五而志于學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲。不踰矩。

子曰く、吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従いて、矩を踰えず。

先師が仰った。私は十五歳で学問に志した。三十歳で学問の基礎が確立した。四十歳で学問に自信持って迷いがなかごてなった。五十歳で天から授かった使命ば悟った。六十歳で人の話を素直に聞けて自然に真理を受け入れることがでくるごてなった。そして七十歳になってはじめて、自分の思うままに行動したっちゃ決して道義から外れることが無かごてなった。

02-05 孟懿子問孝。子曰。無違。樊遲御。子告之曰。孟孫問孝於我。我對曰無違。樊遲曰。何謂也。子曰。生事之以禮。死葬之以禮。祭之以禮。
孟懿子、孝を問う。子曰く、違ふこと無かれ、と。樊遲御たり。子之に告げて曰く、孟孫、孝を我に問う。我對えて曰く、違ふこと無かれ、と。樊遲曰く、何の謂ぞや、と。子曰く、生きては之れに事うるに礼を以てし、死しては之を葬むるに礼を以てし、之を祭るに礼を以てす。

大夫の孟懿子が孝の道ば先師にたずねた。すると先師はこたえられた。はずれんごてなさるがよかろうと存じます。そのあと、樊遲が先師の車の御者ばつとめていた時、先師が彼にいわれた。孟孫が孝の道ば私にたずねたので、私はただ、はずれんごてなさるがよか、と答えておいたよ。樊遲がたずねた。それはどがん意味でございますか。先師がこたえられた。親の存命中は礼をもって仕え、その死後は礼をもって葬り、礼をもって祭る。つまり、礼にはずれんという意味だ。

02-06 孟武伯問孝。子曰。父母唯其疾之憂。
孟武伯、孝を問う。子曰く、父母は唯其の疾を之れ憂う。

孟武伯が孝の道先師にたずねたりや先師は答えらした。子どもが父母の健康ば心配して、父母が病氣にかからんごて憂えるのが孝行だ。

02-07 子游問孝。子曰。今之孝者。是謂能養。至於犬馬。皆能有養。不敬何以別乎。
子游、孝を問う。子曰く、今の孝は、是れ能く養うを謂う。犬馬に至るまで、皆能く養うこと有り。敬せずんば、何を以て別たんや。

子游が孝の道先師にたずねた。先師がこたえられた。現今では、親に衣食の不自由をさせんば、そりが孝行だとされとるばって、それだけのことなる、犬や馬ば飼う場合も同じだ。もし敬うちゅうことがなかつたらば、両者になんの区別があろうかい。

02-08 子夏問孝。子曰。色難。有事弟子服其勞。有酒食先生饌。曾是以爲孝乎。
子夏、孝を問う。子曰く、色難し。事有れば、弟子其の勞に服し、酒食有れば、先生に饌す。曾ち是を以て孝と為さんや。

子夏が孝の道先師にたずねた。先師がこたえられた。むずかしかとは、どがん顔つきをして仕えるかだ。仕事は若いもの、ご馳走は老人と、型どおりにやったっちゃ、それに真情がこもらなんば孝行にやならんじやろう。

02-09 子曰。吾與回言終日。不違如愚。退而省其私。亦足以發。回也不愚。
子曰く、吾、回と云うこと終日、違わざること愚なるが如し。退きて其の私を省みれば、亦以て發するに足る。回や愚ならず。

先師が仰った。回と終日話していても、彼は私のいうことばただ大人しく聞いているばかりで、まるで馬鹿のごたる。ところが彼自身の生活ば見れば、あべこべに私の方が教えられるところが多か。回という人間は決して馬鹿じゃなか。

02-10 子曰。視其所以。觀其所由。察其所安。人焉廋哉。人焉廋哉。

子曰く、其の以てする所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉んぞ廋さんや、人焉んぞ廋さんや。

先師が仰った。人間のねうちというもんな、そんな人が何ばすつとか、何のためにそりばすつとか、そしてどのへんにそんな人の気持の落ちつきどころがあつとか、そういうことば觀察してみれば、ゆうわかるもんだ。人間な自分ばごまかそうとしたっちゃごまかせるもんじゃなか。決してごまかせるもんじゃなか。

02-11 子曰。温故而知新。可以爲師矣。

子曰く、故を温ねて新しきを知れば、以て師爲る可し。

先師が仰った。古かもんば習熟愛護し、しかも新しか知識ば求める人なれば、人ば導く資格がある。

02-12 子曰。君子不器。

子曰く、君子は器ならず。

先師が仰った。君子は狭い範圍の仕事や技術にしか対応できないのではいけない。広くいろいろな事に通じていなければいけない。

02-13 子貢問君子。子曰。先行其言。而後從之。

子貢、君子を問う。子曰く、先ず其の言を行ひ、而る後に之に従う。

子貢が君子たるものの心得ばたずねた。先師はこたえられた。君子は、言いたいことあれば、まずそりば吾がでしてから言うもんだ。

02-14 子曰。君子周而不比。小人比而不周。

子曰く、君子は周して比せず。小人は比して周せず。

先師が仰った。君子の交りは普遍的であつて派閥ば作らん。小人の交りは派閥ば作つて普遍的でなか。

02-15 子曰。學而不思則罔。思而不學則殆。

子曰く、學びで思わざれば則ち罔し。思いて學ばざれば則ち殆うし。

先師が仰った。先人の知識ば學ぶだけで自分で考えんば、真理の光は見えてこん。逆に自

分で考えるばかりで先人の知識ば学ばんば独断におちいる危険がある。

02-16 子曰。攻乎異端。斯害也已。

子曰く、異端を攻むるは斯れ害あるのみ。

先師が仰った。異端の学問ばしたっちゃ害だけしかなか。

02-17 子曰。由。誨女知之乎。知之爲知之。不知爲不知。是知也。

子曰く、由、女に之を知ること誨えんか。之を知るを之を知ると爲し、知らざるを知らずと爲す。是れ知るなり。

先師が仰った。由よ、お前に『知る』ということほどがんことか、教えてあげよう。知つとることは知つとる、知らんことは知らんとして、素直な態度になる。そりが知るちゅうことになつと。

02-18 子張學干祿。子曰。多聞闕疑。慎言其餘。則寡尤。多見闕殆。慎行其餘。則寡悔。

言寡尤。行寡悔。祿在其中矣。

子張、祿を干むるを学ぶ。子曰く、多く聞きて疑わしきを闕き、慎みて其の余りを言えば尤め寡なし。多く見て殆きを闕き、慎みて其の余りを行えば悔い寡なし。言に尤め寡なく、行いに悔い寡なければ、祿其の中に在り。

子張は求職の方法ば知りたがとつた。先師はこれを諭して仰った。なっだけ多く聞くがよか。そして、疑わしかことばさけて、用心深くたしかなことだけば言うておれば、非難さるることが少なか。なっだけ多く見るがよか。そして、あぶなかと思ふことはさけて、自信のあることだけば用心深く実行しとれば、後悔することが少なか。非難さるることが少なか、後悔することが少なければ、自然に就職の道はひらけてくるもんだ。

02-19 哀公問曰。何爲則民服。孔子對曰。舉直錯諸枉。則民服。舉枉錯諸直。則民不服。

哀公問うて曰く、何を爲さば則ち民服せん。孔子對えて曰く、直きを挙げて諸を枉れるに錯けば、民服せん。枉れるを挙て諸を直きに錯けば、則ち民服せず。

哀公がたずねられた。どがんしたら人民が心服すつどうか。先師がこたえられた。正しか人ば挙用してまがった人の上におけば、人民は心服いたします。まがった人ば挙用して正しい人の上におけば、人民は心服いたしまっせん。

02-20 季康子問。使民敬忠以勸。如之何。子曰。臨之以莊則敬。孝慈則忠。舉善而教不能則勸。

季康子問う。民をして敬忠にして、以て勸ましむるには、之を如何せん。子曰く、之れに臨むに莊を以てすれば則ち敬、孝慈なれば則ち忠、善を挙げて不能を教うれば勸む。

大夫の季康子がたずねた。人民をしてそんな支配者に対して敬意と忠誠の念ば抱かせ、すす

んで善ば行なわするごてすつためにや、どがんしたらよかでしょうか。先師はこたえられた。支配者の態度が莊重端正であれば人民は敬意を払います。支配者が親に孝行であり、すべての人に対して慈愛の心があれば、人民は忠誠になります。有徳の人ば挙げて、能力の劣った者ば教育すれば、人民はおのずから善に励みます。

02-21 或謂孔子曰。子奚不爲政。子曰。書云。孝乎惟孝。友于兄弟。施於有政。是亦爲政。奚其爲爲政。

或るひと孔子に謂いて曰く、子奚ぞ政を為さざる。子曰く、書に云う、孝なるか惟う、兄弟に友なり、有政に施すと。是れ亦政を為すなり。奚ぞ其れ政を為すことを為さん。

ある人が先師にたずねて言うた。先生はどい政治にお携りになりませんか。先師はこたえらした。書経に、孝についてこがん言うてある。『親に孝行であり、兄弟に親密であり、それがおのずから政治に及んでいる』と。これで見ると、家庭生活ば美しくするのもまた政治だ。しいて国政の要にあたる必要もなからう。

02-22 子曰。人而無信。不知其可也。大車無輓。小車無軌。其何以行之哉。

子曰く、人にして信無くんば、其の可なるを知らざるなり。大車に輓無くんば、小車に軌無くんば、其れ何を以てか之を行らんや。

先師が仰った。人間に信がななれば、どがんもならん。大車に牛ばつなぐながえの横木がなく、小車に馬をつなぐながえの横木がななれば、どがんして前進がでくつどか。人間における信もそんとおりだ。

02-23 子張問。十世可知也。子曰。殷因於夏禮。所損益可知也。周因於殷禮。所損益可知也。其或繼周者。雖百世可知也。

子張問う、十世知る可きや。子曰く、殷は夏の礼に因る。損益する所知る可きなり。周しゅうは殷いんの礼れいに因よる。損益そんえきする所ところ知しる可べきなり。其れ或いは周に繼ぐ者は、百世と雖も知る可きなり。

子張がたずねた。十代も後のことが果してわかるものでございましょうか。先師がこたえられた。わかるとも、殷の時代は夏の時代の礼制ば踏襲して、いくらか改変したところもあるばって、根本は変つとらん。周の時代は殷の時代の礼制ば踏襲して、いくらか改変したところがあるばって、やはり根本は変つとらん。今後周について新しい時代がくるかも知れんばって、礼の根本は変らんだらう。真理というもんな、こがん過現未を通ずるもんだ。従って十代どころか百代の後も予見でくつと。

02-24 子曰。非其鬼而祭之。諂也。見義不爲。無勇也。

子曰く、其の鬼に非ずして之れを祭るは諂いなり。義を見て為さざるは勇無きなり。

先師が仰った。自分の祭るべき霊でもなかとに無闇に祭つとは、ただのへつらいだ。やる

べき正しい道ば眼前にしながら、そりばやらんとは臆病で勇気がなかけんたい。

八佾第三 1

03-01 孔子謂季氏。八佾舞於庭。是可忍也。孰不可忍也。

孔子、季氏を謂う、八佾を庭に舞わす、是を忍ぶ可くんば、孰れをか忍ぶ可からざらん

先師が季氏を批評して仰った。季氏は前庭で八佾の舞を舞わせたばって、これがゆるせたら、世の中にゆるせんことはなかろう。

03-02 三家者以雍徹。子曰。相維辟公。天子穆穆。奚取於三家之堂。

三家者、雍を以て徹す。子曰く、相くるは維れ辟公、天子は穆穆たりと。奚ぞ三家の堂に取らん。

三家のものが、雍の詩ば歌って祭祀の供物ば下げた。先師がこりば非難して仰った。雍の詩には、『諸侯が祭りば助けている。天子はその座にあって威儀を正している』という意味の言葉もあるし、がんらい三家の祭りなどで歌えるごたる性質のもんではなか。

03-03 子曰。人而不仁。如禮何。人而不仁。如樂何。

子曰く、人にして不仁ならば、礼を如何せん。人にして不仁ならば、樂を如何せん。

先師が仰った。不仁な人が礼ば行なったっちゃ何になろきゃ。不仁な人が樂を奏したっちゃ何になろきゃ。

03-04 林放問禮之本。子曰。大哉問。禮與其奢也寧儉。喪與其易也寧戚。

林放、礼の本を問う。子曰く、大なるかな問や。礼は其の奢らんよりは寧ろ儉せよ。喪は其の易めんよりは寧ろ戚め。

林放が礼の根本義をたんねた。先師がこたえられた。大事な質問だ。吉礼は、ぜいたくに金をかけるよりか、つまし過ぎる方がよか。凶礼は手落ちがなかことよりか、深か悲しみの情があらわれとる方がよか。

03-05 子曰。夷狄之有君。不如諸夏之亡也。

子曰く、夷狄すら之れ君有り。諸夏の亡きが如くならず。

先師が仰った。夷狄の国にも君主があつて秩序がある。現在の乱脈な中華諸国のごてにやなかと。

03-06 季氏旅於泰山。子謂冉有曰。女弗能救與。對曰。不能。子曰。嗚呼。曾謂泰山不如林放乎。

季氏、泰山に旅す。子、再有に謂いて曰く、女救うこと能わざるか。対えて曰く、能わず。子曰く、嗚呼、曾ち泰山を林放に如かずと謂えるか。

季氏が泰山の山祭りをしようとした。先師が再有に仰った。お前は季氏の過ちば救うことができんとか。再有がこたえた。私の力にやもうおよぼんです。先師がため息ついて仰った。するとおまえは、泰山の神は林放という一書生にも及ばんと思うとっとか。

03-07 子曰。君子無所争。必也射乎。揖讓而升下。而飲。其争也君子。

子曰く、君子は争う所無し。必ずや射か。揖讓して升下し、而して飲ましむ。其の争いや君子なり。

先師が仰った。君子は争わなん。争うとすれば弓の競射ぐらいなもんじゃろう。それもゆずりおうて射場にのぼり、勝負がすめば射場ば下って仲よく酒ば飲む。争うにしたっちゃ君子らしい争うんだ。

03-08 子夏問曰。巧笑倩兮。美目盼兮。素以爲絢兮。何謂也。子曰。繪事後素。曰。禮後乎。子曰。起予者商也。始可與言詩已矣。

子夏問いて曰く、巧笑倩たり、美目盼たり、素以て絢を為すとは、何の謂いぞや。子曰く、繪事は素を後にす。曰く、礼は後なるか。子曰く、予を起す者は商なり。始めて与に詩を言う可きのみ。

子夏が先師にたずねた。『笑えばえくぼが愛くるしい。眼はぱっちり澄んでいる。それにお化粧が匂ってる』という歌がありますが、これにや何か深か意味があつとでしょうか。先師がこたえられた。絵の場合でいえば、見事な絵がかけて、その最後の仕上げに胡粉ばかくるごたつとじゃろうね。子夏がいった。なるほど。すると礼は人生の最後の仕上げにあたるわけでございまっしゅか。ぼって、人生の下絵が立派でなからんば、その仕上げには何の値打ちも無かですね。先師が喜うで言われた。商よ、お前にや私も教えられる。そっでこそ一緒に詩の話がでくるといふもんだ。

03-09 子曰。夏禮吾能言之。杞不足徵也。殷禮吾能言之。宋不足徵也。文獻不足故也。足則吾能徵之矣。

子曰く、夏の礼は吾能く之を言えども、杞は徵するに足らざるなり。殷の礼は吾れ能く之を言えども、宋は徵するに足らざるなり。文献足らざるが故なり。足らば則ち吾能く之を徵せん。

先師が仰った。私はしばしば夏の礼制の話ばするが、夏の子孫の国である現在の杞には、私のいうことば証拠立てるごたるもんが何も残つとらん。私はしばしば殷の礼制の話ばするぼって、殷の子孫の国である現在の宋にや、私のいうことば証拠立てるごたるもんが何も残つとらん。それは典籍も不十分であり、賢人もおらんからだ。それらがありしやかす

れば、私は私のいうことが正しかということば完全に証拠立てるこつがでくつとばって。

03-10 子曰。禘自既灌而往者。吾不欲觀之矣。

子曰く、禘は既に灌してより往は、吾之を觀るを欲せず。

先師が仰った。禘の祭は見たくなかもんの一つばって、そつでも酒ば地に注ぐ降神式あたりまでは、まだどがんか我慢でくる。ばってその後とはとても見とられん。

03-11 或問禘之說。子曰。不知也。知其說者之於天下也。其如示諸斯乎。指其掌。

或るひと禘の說を問う。子曰く、知らざるなり。其の說を知る者の天下に於けるや、其れ諸を斯に示すが如きか、と。其の掌を指せり。

ある人が禘の祭のことば先師にたずねた。すると先師は、自分の手のひらば指でさしながら、答えられた。私は知らん。もし禘の祭のことが本当にわかるとる人が天下ば治めたら、そん治績の確かなことは、こん手のひらにのせて見るより、明らかなことたい。

03-12 祭如在。祭神如神在。子曰。吾不與。祭如不祭。

祭こと在すが如くす。神を祭るには神在すが如くす。子曰く、吾祭に与らざれば、祭らざるが如し。

先師は、祖先ば祭る時にや、祖先ばまのあたりに見るごたる、また、神を祭る時にや、神ばまのあたりに見るごたるご様子で祭られた。そしていつも仰った。私は自分みずから祭ば行なわんと、祭ったちゅう気がせん。

03-13 王孫賈問曰。與其媚於奧。寧媚於竈。何謂也。子曰。不然。獲罪於天。無所禱也。

王孫賈、問いて曰く、其の奥に媚びんよりは、寧ろ竈に媚びよ、とは何の謂いぞや。子曰く、然らず、罪を天に獲れば、禱る所無きなり。

王孫賈が先師にたずねた。奥の神様に媚びるよりか、むしろ竈ん神様に媚びろ、ということわざがございますばって、どがんお考えになりますか。先師がこたえられた。そりゃいかん。大切なことは罪ば天に得んごて心がくることです。罪ば天に得たら、どがん神様に祈っても甲斐がなか。

03-14 子曰。周監於二代。郁郁乎文哉。吾從周。

子曰く、周は二代に監みて、郁郁として文なるかな。吾は周に従わん。

先師が仰った。周の王朝は、夏殷二代の王朝の諸制度ば参考にして、すばらしか文化ば創造した。私は周の文化に従いたか。

03-15 子入太廟。每事問。或曰。孰謂鄒人之子知禮乎。入太廟。每事問。子聞之曰。是禮

也。
子、大廟に入りて、事毎に問う。或るひと曰く、孰か郷人の子を、礼を知ると謂うや。大廟に入りて事毎に問と。子之を聞いて曰く、是れ礼なり。

先師が大廟に入って祭典の任に当られた時、事ごとに係の人に質問された。それをある人があざけて言うた。あん郷の田舎者のせがれが、礼に通じとるなどとは、いったいだれがいいだしたことなんだ。大廟にはいって事ごとに質問しとつとじゃなかか。先師はこれをきかれて、仰った。慎重にきくとが礼なんだ。

03-16 子曰。射不主皮。爲力不同科。古之道也。

子曰く、射は皮を主とせず。力を為すに科を同じくせず。古の道なり。

先師が仰った。射の主目的は的にあてることで、的皮ば射ぬくことじゃなか。人の力には強弱があつて等しくなか。これは古からの道である。

03-17 子貢欲去告朔之餼羊。子曰。賜也。爾愛其羊。我愛其禮。

子貢、告朔の餼羊を去らんと欲す。子曰く、賜や、爾は其の羊を愛む、我は其の礼を愛む。

子貢が、告朔の礼に餼羊をお供えするのは無駄だと言うて、これば廃止するごて希望した。すると先師は仰った。賜よ、おまえは羊が惜しかつか。私は礼が廢るつとが惜しか。

03-18 子曰。事君盡禮。人以爲諂也。

子曰く、君に事うるに礼を尽くせば、人以て諂いと為すなり。

先師が仰った。君主に仕えて礼を尽くすとは当然だ。然るに世間じゃそりば諂いて言う。

03-19 定公問。君使臣。臣事君。如之何。孔子對曰。君使臣以禮。臣事君以忠。

定公問う、君、臣を使い、臣、君に事うるには、之を如何せん。孔子對えて曰く、君、臣を使うに礼を以てし、臣、君に事うるに忠を以てす。

定公がたずねられた。君主が臣下を使う道、臣下が君主に仕える道についてききたかっです。先師がこたえられた。君主が臣下ば使う道は礼の一語につきます。臣下が君主に仕える道は忠の一語につきます。

03-20 子曰。關雎樂而不淫。哀而不傷。

子曰く、関雎は楽しみて淫せず、哀しみて傷らず。

先師が仰った。関雎の詩は歡樂を歌つとるばつて、歡樂におぼれちゃおらん。悲哀ば歌つとるばつて、悲哀に打ちひしがれちゃおらん。

03-21 哀公問社於宰我。宰我對曰。夏后氏以松。殷人以栢。周人以栗。曰使民戰栗。子聞之曰。成事不說。遂事不諫。既往不咎。

哀公、社を宰我に問う。宰我、對えて曰く、夏后氏は松を以てし、殷人は栢を以てし、周人は栗を以てす。曰く、民をして戰栗せしむと。子、之を聞きて曰く、成事は説かず、遂事は諫めず、既往は咎めず。

哀公が宰我に社の神木についてたずねられた。宰我がこたえた。夏の時代には松を植えました。殷の時代には栢を植えました。周の時代になってからは、栗を植えることになりましたが、それは人民を戰栗させるという意味でございます。先師はこのことばお聞きになって、仰った。できてしもうたことは、言うても仕方なか。やってしもうたことは、いさめても仕方なか。過ぎてしもうたことは、咎めても仕方なか。

03-22 子曰。管仲之器小哉。或曰。管仲儉乎。曰。管氏有三歸。官事不攝。焉得儉。然則管仲知禮乎。曰。邦君樹塞門。管氏亦樹塞門。邦君爲兩君之好。有反坫。管氏亦有反坫。管氏而知禮。孰不知禮。

子曰く、管仲の器は小なるかな。或るひと曰く、管仲は儉なるか。曰く、管氏に三歸有り。官の事ことは撰ねず。焉んぞ儉なるを得ん。然らば則ち管仲は礼を知れるか。曰く、邦君は樹して門を塞さぐ。管氏も亦た樹して門を塞ぐ。邦君は兩君の好みを為すに反坫有り。管氏も亦た反坫有り。管氏にして礼を知らば、孰か礼を知らざらん。

先師が仰った。管仲は人物が小さい。するとある人がたずねた。管仲の人物が小さいと仰るのは、つましい人だからでしょうか。先師がいわれた。つましい？ そんなことはなか。管仲は三歸台ちゅう贅沢な高台ば作り、また、家臣を大勢使うて、決して兼任させんじゃったぐらいだ。すると、管仲は礼を心得て、それにとらわれていたとでもいうのでしょうか。そうでもなか。門内に塀ば立てて目かくしにすつとは諸侯の邸宅のきまりばって、管仲も大夫の身分でそりば立てた。また、酒宴に反坫ば用いっとは諸侯同士の親睦の場合ばって、管仲もまたそりば使うた。そっで礼ば心得とるといえるなれば、誰でん礼ば心得とるじゃろう。

03-23 子語魯大師樂曰。樂其可知也。始作翕如也。從之純如也。皦如也。繹如也以成。

子、魯の大師に樂を語りて曰く、樂は其れ知る可きなり。始作すに翕如たり。之れを從ちて純如たり。皦如たり。繹如たり。以て成る。

先師が魯の樂長に音楽について語られた。およそ音楽の世界は一如の世界だ。そこにはいささかの対立もなか。まず一人一人の樂手の心と手と樂器が一如になり、樂手と樂手とが一如になり、さらに樂手と聴衆とが一如になって、翕如として一つの機をねらう。これが未発の音楽だ。この翕如たる一如の世界が、機熟しておのずから振動をはじめると、純如として濁りがなか音波が人々の耳を打つ。その音はただ一つである。ただ一つではあるばってか、そのなかには金音もあり、石音もあり、それぞれに独自の音色を保って、決して

おたがいに殺しあうことがなか。皦如^{きょうじょ}として独自を守りながら、しかもただ一つの音の流れに没入するのだ。こがんで時がたつにつれ、高低、強弱、緩急、さまざまの変化ば見せるのであるが、その間、厘毫^{りんごう}のすきもなく、繹如^{えきじょ}としてつづいて行く。そこに時間的な一如の世界があり、永遠と一瞬との一致が見出さる。まことの音楽というものは、こうして始まり、こうして終るもんだ。

03-24 儀封人請見。曰。君子之至於斯也。吾未嘗不得見也。從者見之。出曰。二三子。何患於喪乎。天下之無道也久矣。天將以夫子爲木鐸。

儀の封人、見えんことを請う。曰く、君子の斯^{ここ}に至るや、吾未だ嘗て見ゆることを得ずんばあらざるなり。從者之れを見えしむ。出でて曰く、二三子、何ぞ喪^{うしな}うことを患えんや。天下の道無きや久し。天將に夫子を以て木鐸と為さんとす。

儀の関守りが先師に面会を求めていった。有徳のお方がこの関所をお通りになる時に、私がお目にかかれなかったためしは、これまでまだ一度もござっせん。お供の門人たちが、彼を先師の部屋に通した。やがて面会を終って出て来た彼は、門人たちに言うた。諸君は、先生が野に下られたことを少しも悲観されることはありませんぞ。天下の道義が地におちてすでに久しいものですが、天は、先生を一国だけにとめておかんで、天下の木鐸^{ぼくたく}にしようとしとるんです。

03-25 子謂韶。盡美矣。又盡善也。謂武。盡美矣。未盡善也。

子、韶^{しやう}を謂う。美を尽くせり、又善^{また}を尽くせり。武を謂う。美を尽くせり、未だ善を尽くさざるなり。

先師が樂曲韶^{しやう}を讚していわれた。美の極致であり、また善の極致である。さらに樂曲武ぶを評して仰った。美の極致ではあるが、まだ善の極致だとはいえん。

03-26 子曰。居上不寬。爲禮不敬。臨喪不哀。吾何以觀之哉。

子曰く、上に居いて寬^{かん}ならず、礼を為して敬せず、喪に臨んで哀^{あな}しまずんば、吾何を以てか之れを觀んや。

先師が仰った。人の上に立って寛容でなか、礼を行なうとに敬意をかき、葬儀に参列しても悲しい気持になれん人間は、始末におえん人間だ。

りじん 里仁第四

04-01 子曰。里仁爲美。擇不處仁。焉得知。

子曰く、里は仁なるを美^よしと為す。択んで仁に処^{えら}らずんば、焉^{いづく}ぞ知なるを得ん。

先師が仰った。隣保生活には何よりも親切心が第一である。親切気のなかところに居所をえらぶとは、賢明だとは言われん。

04-02 子曰。不仁者。不可以久處約。不可以長處樂。仁者安仁。知者利仁。

子曰く、不仁者は以て久しく約おに処る可からず。以て長く樂おに処る可からず。仁者は仁に安んじ、知者は仁を利す。

先師が仰った。不仁な人間は、長く逆境に身を処することもできんし、また長く順境に身を処することもできん。それができるのは仁者と知者だが、仁者はどんな境遇にあったっちゃ仁そのものに安んずるもんだけんみだれんし、知者は仁の価値ば知って努力するもんだけんみだれん。

04-03 子曰。惟仁者能好人。能惡人。

子曰く、惟ただ仁者のみ能く人を好み、能く人を悪む。

先師が仰った。ただ仁者だけが正しく人ば愛し、正しく人ば悪むことができる。

04-04 子曰。苟志於仁矣。無惡也。

子曰く、苟いやしくも仁に志こころざせば、悪しきこと無きなり。

先師が仰った。志こころざしがたえず仁に向ってさえおれば、過失はあったっちゃ悪を行なうことはなか。

04-05 子曰。富與貴。是人之所欲也。不以其道得之。不處也。貧與賤。是人之所惡也。不以其道得之。不去也。君子去仁。惡乎成名。君子無終食之間違仁。造次必於是。顛沛必於是。

子曰く、富と貴たつときとは、是れ人の欲ほつする所なり。其の道を以てせざれば、之を得とも処らざるなり。貧と賤せんとは、是れ人の悪む所なり。其の道を以てせざれば、之を得とも去らざるなり。君子は仁を去りて、悪いずくにか名を成さん。君子は終食の間も仁に違たがうこと無く、造次そうじにも必ず是に於てし、顛沛かならにも必ず是に於いてす。

先師が仰った。人は誰しも富裕になりたいし、また尊貴にもなりたい。しかし、正道をふんでそれを得るのでなければ、そがんした境遇を享受すべきではなか。人は誰しも貧困にはなろごとなかし、また卑賤ひせんにもなりたくはなか。ばって、道ば誤ってそうなったのでなければ、無理にそればのがれようとあせる必要はなか。君子が仁ば忘れて、どうして君子の名に値しよう。君子は、箸のあげおろしの間にも仁にそむかんで心がけるべきだ。いや、それどころか、あわを食ったり、けつまずいたりする瞬間でも、心は仁にしがみついとらんばならんのだ。

04-06 子曰。我未見好仁者惡不仁者。好仁者無以尚之。惡不仁者其爲仁矣。不使不仁者加乎其身。有能一日用其力於仁矣乎。我未見力不足者。蓋有之矣。我未之見也。

子曰く、我未だ仁を好む者、不仁を悪む者を見ず。仁を好む者は、以て之れに尚くわうる無し。

不仁を悪む者は、其仁を為さん。不仁者をして其の身に加えしめず。能く一日も其の力を仁に用うること有らんか。我未だ力の足らざる者を見ず。蓋し之有らん。我未だ之を見ざるなり。

先師が仰った。私はまだ、真に仁を好む者にも、真に不仁を悪にくむ者にも会ったことがなか。真に仁を好む人は自然に仁を行なう人で、まったく申し分がなか。ぼって不仁を悪む人も、つとめて仁を行なうし、また決して不仁者の悪影響をうけることがなか。せめてその程度には誰でもなりたかものだ。それは何もむずかしかことではなか。今日一日、今日一日と、その日その日ば仁にはげめばよかと。たった一日の辛抱さえできん人はまさかなかろう。あるかも知れんぼって、私はまだ、それもできんごたる人ば見たことがなか。

04-07 子曰。人之過也。各於其黨。觀過斯知仁矣。

子曰く、人の過ちや、各々其の党に於いてす。過ちを觀て斯に仁を知る。

先師が仰った。人がら次第で過失にも種類がある。だけん、過失ば見ただけでも、その人の仁、不仁がわかるもんだ。

04-08 子曰。朝聞道。夕死可矣。

子曰く、朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり。

ある朝、物事の道理ば聞いて満足したろうば、夕方に死んだっちゃ思い残すことはなか。

04-09 子曰。士志於道。而恥惡衣惡食者。未足與議也。

子曰く、士、道に志して、惡衣惡食を恥ずる者は、未だ与に議るに足らざるなり。

先師が仰った。いやしくも道に志すものが、粗衣粗食を恥じるようじゃ、話相手とするに足らん。

04-10 子曰。君子之於天下也。無適也。無莫也。義之與比。

子曰く、君子の天下に於けるや、適無きなり。莫無きなり。義に之与に比す。

先師が仰った。君子が政治の局にあたる場合には、自分の考えを固執し、無理じいに事を行なったり禁止したりすることは決してなか。虚心に道理のあるところに従うだけである。

04-11 子曰。君子懷德。小人懷土。君子懷刑。小人懷惠。

子曰く、君子、徳を懷えば、小人は土を懷い、君子、刑を懷えば、小人は恵を懷う。

先師が仰った。上に立つ者がつねに徳に心がければ、人民は安んじて土に親しみ、耕作にいそむ。上に立つ者が常に刑罰ば思えば、人民はただ上からの恩恵だけに焦慮する。

04-12 子曰。放於利而行。多怨。
子曰く、利に放りて行えば、怨み多し。

先師が仰った。利益本位で行動する人ほど怨恨の種をまくことが多い。

04-13 子曰。能以禮讓爲國乎。何有。不能以禮讓爲國。如禮何。
子曰く、能く礼讓を以て国を為めんか、何か有らん。能く礼讓を以て国を為めずんば、礼を如何せん。

先師が仰った。礼の道にかなった懇切さで国を治めるならば、なんの困難があろうか。もし国を治むつとに、そうした懇切さは欠くなら、いったい礼制はなんのためのものか。

04-14 子曰。不患無位。患所以立。不患莫己知。求爲可知也。
子曰く、位無きを患えず、立つ所以を患う。己を知ること莫きを患えず、知らる可きを為すを求むるなり。

先師が仰った。地位のなかとば心配するより、自分にそれだけの資格があるかどうかば心配するがよか。また、自分が世間に認められんとば気にやむより、認められるだけの価値のある人間になるごて努力するがよか。

04-15 子曰。參乎。吾道一以貫之。曾子曰。唯。子出。門人問曰。何謂也。曾子曰。夫子之道。忠恕而已矣。
子曰く、參や、吾が道は一以て之を貫く。曾子曰く、唯。子出ず。門人、問いて曰く、何の謂いぞや。曾子曰く、夫子の道は、忠恕のみ。

先師が仰った。參よ、私の道はただ一つの原理で貫かれているんだ。曾先生がこたえられた。さようでございます。先師はそう言って室を出て行かれた。すると、ほかの門人たちが曾先生にたずねた。今のはなんのことでしょう。曾先生はこたえて仰った。先生の道は忠恕の一語につきるんです

04-16 子曰。君子喻於義。小人喻於利。
子曰く、君子は義に喻り、小人は利に喻る。

先師が仰った。君子は万事を道義に照らして会得するばって、小人は万事を利害から割出して会得する。

04-17 子曰。見賢思齊焉。見不賢而内自省也。
子曰く、賢を見ては齊しからんことを思い、不賢を見ては内に自ら省みるなり。

先師が仰った。賢者ば見たら、自分もそうありたかと思うがよかし、不賢者ば見たら、

自分はどがんだらうかと内省するがよか。

04-18 子曰。事父母幾諫。見志不從。又敬不違。勞而不怨。

子曰く、父母に事^{つか}うるには幾諫^{きかん}す。志^{こころざし}の従わざるを見ては、又敬^{けい}して違^{ちが}わず、勞^{うら}して怨^{うら}みず。

先師が仰った。父母に仕えて、その悪を黙過するのは子の道ではなか。言葉をやわらげてそれをいさめるがよか。もし父母がきかなかつたら、いっそう敬愛の誠ばつくして、根氣よくいさめることだ。苦しいこともあるだらうばって、決して親ば怨んではならん。

04-19 子曰。父母在。不遠遊。遊必有方。

子曰く、父母^{いま}在^{いま}せば、遠^{とほ}く遊^{あそ}ばず。遊^{あそ}ぶに必^{かなら}ず方^{ほう}有^あり。

先師が仰った。父母の存命中は、遠い旅行などはあまりせんがよか。やむを得ず旅行する場合は行先ば明らかにしておくべきだ。

04-20 子曰。三年無改於父之道。可謂孝矣。

子曰く、三年、父の道^いを改^かむること無^なきは、孝^いと謂^いう可^べし。

先師が仰った。もし父の死後三年間そのしきたりば変えんば、そん人は孝子といえるだらう。

04-21 子曰。父母之年。不可不知也。一則以喜。一則以懼。

子曰く、父母の年^へは、知^しらざる可^べからざるなり。一^{いつ}には則^{すなわ}ち以^もて喜^こび、一^{いつ}には則^{すなわ}ち以^もて懼^{おそ}る。

先師が仰った。父母の年齢は忘れてはならん。一つにはその長命を喜ぶために、一つには老い先の短いのおそれていよいよ孝養をはげむために。

04-22 子曰。古者。言之不出。恥躬之不逮也。

子曰く、古^{いにしえ}者、言^{げん}の出^いださざるは、躬^みの逮^{およ}ばざるを恥^はずればなり。

先師が仰った。古人は軽々しく物を言わなかつたが、それは実行の伴わないのを恥じたからだ。

04-23 子曰。以約失之者鮮矣。

子曰く、約^{すくな}を以^もて之^{これ}を失^なう者は鮮^{すくな}し。

先師が仰った。ひかえ目にしているしくじる人は少ないか。

04-24 子曰。君子欲訥於言。而敏於行。

子曰く、君子は言に訥にして、行いに敏ならんことを欲す。

先師が仰った。君子は、口は不調法でも行ないには敏活でありたかと願うもんだ。

04-25 子曰。徳不孤。必有鄰。

子曰く、徳は孤ならず、必ず隣有り。

先師が仰った。よか行いをしとれば孤立することはけして無か。必ず理解者があらわれるもんだ。

04-26 子游曰。事君數。斯辱矣。朋友數。斯疏矣。

子游曰く、君に事えて數すれば、斯に辱めらる。朋友に數すれば、斯疏んぜらる。

子游が仰った。君主に対して忠言の度がすぎると、きっとひどい目にあわさる。友人に対して忠告の度が過ぎれば、きつとうとまるる。

公治長第五 1

05-01 子謂公治長。可妻也。雖在縲紲之中。非其罪也。以其子妻之。子謂南容。邦有道不廢。邦無道免於刑戮。以其兄之子妻之。

子、公治長を謂う、妻あわす可きなり。縲紲の中に在りと雖も、其の罪に非ざるなりと。其の子を以て之に妻あわす。子、南容を謂う、邦に道有れば廢せられず、邦に道無きも、刑戮より免ると。其の兄の子を以て之に妻あわす。

先師が公治長を評して仰った。あの人物なら、娘ば嫁にやってもよか。かつては縄目の恥をうけたこともあったばって、無実の罪じゃった。そして彼ば自分の婿にさした。また先師は南容ば評して仰った。あん人物なら、国が治まっている時には必ず用いられるじゃろうし、国が乱れておっても刑罰ば受くるようなことは決してなかつた。そして兄上の娘ば彼の嫁にやんなした。

05-02 子謂子賤。君子哉若人。魯無君子者。斯焉取斯。

子、子賤を謂う、君子なるかな、若き人。魯に君子者無くんば、斯れ焉にか斯を取らん。

先師が子賤を許して仰った。こういう人こそ君子というべきだ。しかし、もし魯の国に多くの君子がいなかったとしたら、彼もなかなかこうはなれんだったろう。

05-03 子貢問曰。賜也何如。子曰。女器也。曰。何器也。曰。瑚璉也。

子貢、問いて曰く、賜や何如。子曰く、女は器なり。曰く、何の器ぞや。曰く、瑚璉なり。

先師が人物評をやっておられると、子貢がたずねた。私はいかがでございましょうか。先師がこたえられた。おまえは見事な器（りっぱな働きのできる人物）だね。子貢がかさねてたずねた。どんな器でございましょうか。先師がこたえられた。瑚璉（宗廟の祭りに飯を盛って神前に供える器）だ。

05-04 或曰。雍也仁而不佞。子曰。焉用佞。禦人以口給。屢憎於人。不知其仁。焉用佞。或るひと曰く、雍や、仁にして佞ならず。子曰く、焉んぞ佞を用いん。人を禦ぐに口給を以てすれば、屢人に憎くまる。其の仁なるを知らず、焉んぞ佞を用いん。

ある人がいった。雍は仁者ではありますが、惜しかことに口下手で、人ば説きふする力がありません。すると先師が仰った。口下手など、どがんでんよかことではなかね。人に接して口先だけうまいことばいう人は、たいていしみやには、あいそつかされるもんだよ。私は雍が仁者であるかどうかは知らんばって、とにかく、口下手は問題じゃなかね。

05-05 子使漆彫開仕。對曰。吾斯之未能信。子說。子、漆彫開をして仕えしむ。對えて曰く、吾斯を之れ未だ信ずること能わず、子説ぶ。

先師が漆彫開に仕官をすすめられた。すると、漆彫開はこたえた。私には、まだ役目ば果たすだけ自信がありません。先師はそのこたえば心から喜びなした。

05-06 子曰。道不行。乘桴浮于海。從我者其由與。子路聞之喜。子曰。由也好勇過我。無所取材。

子曰く、道行われず、桴に乗りて海に浮かばん。我に従う者は其れ由なるか。子路、之を聞いて喜ぶ。子曰く、由や勇を好むこと我に過ぎたり。材を取る所無なし。

先師が仰った。私の説く治国の道も、とうてい行なわれそうになかし、そろそろ桴にでも乗って海外に出ようと思うが、いよいよそうなった場合、私について来てくるっとは、由かな。子路はそればきいて大喜びじゃった。すると先師がまた仰った。ところで、由は、勇気を愛する点では私以上ばって、分別が足りんけん、いささか心細かね。

05-07 孟武伯問。子路仁乎。子曰。不知也。又問。子曰。由也。千乘之國。可使治其賦也。不知其仁也。求也何如。子曰。求也。千室之邑。百乘之家。可使爲之宰也。不知其仁也。赤也何如。子曰。赤也東帶立於朝。可使與賓客言也。不知其仁也。

孟武伯問う、子路は仁なるか。子曰く、知らざるなり。又た問う。子曰く、由や、千乗の国、其の賦を治めしむ可きなり。其の仁を知らざるなり。求や何如。子曰く、求や、千室の邑、百乗の家、之れが宰たらしむ可きなり。其の仁を知らざるなり。赤や何如。子曰く、赤や、東帶して朝に立ち、賓客と言わしむ可きなり。其の仁を知らざるなり。

孟武伯が先師にたずねた。子路は仁者でございましょうか。先師がこたえられた。わかり

ません。孟武伯は、しかし、おしかえしてまた同じことばたずねた。すると先師は仰った。由は千乗の国の軍事をつかさどるだけの能力はあるでしょう。ばって仁者といえるかどうかは疑問です。では、求はいかがでしょう。先師はこたえられた。求は千戸の邑の代官とか、百乗の家の執事とかいう役目なら十分果たせましょう。しかし、仁者といえるかどうかは疑問です。赤はどがんでしょう。先師はこたえられた。赤は式服をつけ、宮廷において外国の使臣の応接ばすつとには適しています。ばって、仁者であるかどうかは疑問です。

05-08 子謂子貢曰。女與回也孰愈。對曰。賜也何敢望回。回也聞一以知十。賜也聞一以知二。子曰。弗如也。吾與女弗如也。
子、子貢に謂いて曰く、女と回と孰れか愈れる。對えて曰く、賜や、何ぞ敢て回を望まん。回や一を聞いて以て十を知る。賜や一を聞いて以て二を知るのみ。子曰く、如かざるなり。吾と女と如かざるなり。

先師が子貢に仰った。おまえと回とは、どちらがすぐれていると思うかね。子貢がこたえていった。私ごときが、回と肩をならべるなど、思いも及びません。回は一を聞いて十を知ることができますが、私は一を聞いてやっとなを二を知るにすぎません。すると先師は仰った。実際、回には及ばんね。それはおまえのいうとおりだ。おまえのその正直な答はよい。

05-09 宰予晝寢。子曰。朽木不可雕也。糞土之牆。不可朽也。於予與何誅。子曰。始吾於人也。聽其言而信其行。今吾於人也。聽其言而觀其行。於予與改是。
宰予、晝寢ぬ。子曰く、朽木は雕る可からず。糞土の牆は朽る可からず。予に於いてか何ぞ誅めん。子曰く、始め吾、人に於けるや、其の言を聴きて其の行いを信ぜり。今吾、人に於けるや、其の言を聴きて其の行いを觀る。予に於いてか、是を改む。

宰予が昼寝をしていた。すると先師が仰った。くさった木には彫刻はできん。ぼろ土の塀はうわ塗りをしてもだめだ。おまえのようななまけ者を責めても仕様がなか。それから、しばらくしてまた仰った。これまで私は、誰でもめいめい口でいうとおりのことを実行しているものだとばかり信じておった。しかしこれからは、もうそうは信じておられん。いうことと行なうこととが一致しているかどうか、それをはっきりつきとめんと、安心がでけんごてなってきた。おまえのごたる人間もいるのだから。

05-10 子曰。吾未見剛者。或對曰申枨。子曰。枨也慾。焉得剛。
子曰く、吾未だ剛者を見ず。或るひと對えて曰く、申枨と。子曰く、枨や慾あり。焉んぞ剛なるを得ん。

先師が、仰った。私はまだ剛者というほどの人物に会ったことがない。するとある人がいった。申枨という人物がいるではありませんか。先師は、仰った。枨は慾が深い。あんなに慾が深くては剛者にはなれんね

05-11 子貢曰。我不欲人之加諸我也。吾亦欲無加諸人。子曰。賜也非爾所及也。

子貢曰く、我人の諸を我に加うることを欲せざるや、吾も亦た諸を人に加うること無からんと欲す。子曰く、賜や、爾の及ぶ所に非ざるなり。

子貢が言った。私は、自分が人からされたくないことは、自分もまた人に対してしたくないと思っています。すると先師が仰った。賜よ、それはまだまだおまえにできることではなか。

05-12 子貢曰。夫子之文章。可得而聞也。夫子之言性與天道。不可得而聞也。

子貢曰く、夫子の文章は、得て聞く可きなり。夫子の性と天道とを言うは、得て聞く可からざるなり。

子貢がいった。先生のご思想、ご人格の華というべき詩書礼楽のお話や、日常生活の実践に関するお話は、いつでもうかがえるが、その根本をなす人間の本質とか、宇宙の原理とかいう哲学的なお話は、容易にはうかがえない。

05-13 子路有聞。未之能行。唯恐有聞。

子路は聞くこと有りて、未だ之を行うこと能わずんば、唯だ聞くこと有るを恐る。

子路は、一つの善言をきいて、まだそれを実践することができない間は、さらに新しい善言を聞くことを恐れた。

05-14 子貢問曰。孔文子何以謂之文也。子曰。敏而好學。不恥下問。是以謂之文也。

子貢問いて曰く、孔文子は何を以て之を文と謂うや。子曰く、敏にして学を好み、下問を恥じず。是を以て之を文と謂うなり。

子貢がたずねた。孔文子はどうして文というりっぱなおくり名をされたのでありましょうか。先師がこたえられた。天性明敏なうえに学問を好み、目下のものに教えを乞うのを恥としなかった。そういう人だったから文というおくり名をされたのだ。

05-15 子謂子産。有君子之道四焉。其行己也恭。其事上也敬。其養民也惠。其使民也義

子、子産を謂う。君子の道、四つ有り。其の己を行うや恭。其の上に事うるや敬。其の民を養うや惠。その民を使うや義。

先師が子産のことを評して仰った。子産は、為政家の守るべき四つの道をよく守っている人だ。彼はまず第一に身を持すること恭謙である。第二に上に仕えて敬慎である。第三に人民に対して慈恵を旨としている。そして第四に人民の使役の仕方が公正である。

05-24 子曰。巧言令色足恭。左丘明恥之。丘亦恥之。匿怨而友其人。左丘明恥之。丘亦恥

之。

子曰く、巧言、令色、足恭なるは、左丘明之を恥ず。丘も亦之を恥ず。怨みを匿して其の人を友とするは、左丘明之を恥ず。丘も亦之を恥ず。

先師が仰った。口先だけでうまいことを言うたり、うわべだけ愛想よくとりつくろったりするような人間は、本当の思いやりの心が少なか。左丘明は恥じとったばって、私もそれを恥じる。心に怨みをいだきながら、表面だけいかにも友達らしく振舞うのを、左丘明は恥じとったが、私もそれを恥じる

06-18 子曰。知之者不如好之者。好之者不如樂之者。

子曰く、之を知る者は之を好む者に如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かず。

先師が仰った。真理を知る者は真理を好む者に及ばない。真理を好む者は真理を楽しむ者に及ばない

07-21 子曰。三人行。必有我師焉。擇其善者而從之。其不善者而改之。

子曰く、三人行なわば、必ず我が師有り。其の善き者を択びて之に従い、其の善からざる者は之を改む。

先師が仰った。三人道づれをすれば、めいめいに二人の先生をもつことになる。善か道づれは手本になってくれるし、悪い道づれは、反省改過の刺戟になり汚点を改めればよか。

07-26 子釣而不綱。弋不射宿。

子、釣して綱せず。弋して宿を射ず。

先師は釣りはされたが、綱は使われなかった。また矢で鳥をとられることはあったが、ねぐらの鳥を射たれることはなかった

11-15 子貢問。師與商也孰賢。子曰。師也過。商也不及。曰。然則師愈與。子曰。過猶不及。

子貢問う、師と商と孰れか賢れる。子曰く、師や過ぎたり。商や及ばず。曰く、然らば則ち師愈れるか。子曰く、過ぎたるは猶及ばざるが如し。

子貢がたずねた。師と商とでは、どちらが優れておりましたか。先師がこたえられた。師はやり過ぎていて。商は行き足りない。

子貢が更にたずねた。では、師の方が優れているのでございましょうか。すると、先師がこたえられた。行き過ぎるのは行き足りないのと同じだ。中庸が大事だ。

13-23 子曰。君子和而不同。小人同而不和。

子曰く、君子は和して同ぜず、小人しょうじんは同じて和せず。

先師が仰った。君子は人と心から理解しあおうと努めるが、上っ面だけの馴れ合いにはならない。小人は上っ面だけの馴れ合いにはなるが、心から理解しあおうとは努めない。

13-27 子曰。剛毅木訥。近仁。

子曰く、剛毅木訥こうきぼくとつは仁に近し。

先師が仰った。剛健な意志、毅然たる節操、表裏のない質朴さ、粉飾のない訥々としてつたる言葉、こうした資質は、最高の徳たる仁に近い徳である。

14-32 子曰。不患人之不己知。患其不能也。

子曰く、人の己を知らざるを患えず。其の不能うれを患うるなり。

先師が仰った。人が自分を認めてくれないのを気にかけることはない。自分にそれだけの能力がないのを気にかけるがよか。

15-23 子貢問曰。有一言而可以終身行之者乎。子曰。其恕乎。己所不欲。勿施於人。

子貢、問いて曰く、一言にして以て終身之を行う可き者有りや。子曰く、其れ恕か。己おのれの欲せざる所は、人に施すこと勿かれ。

子貢がたずねた。ただ一言で生涯の行為を律すべき言葉がございましょうか。先師がこたえられた。それは恕じよだろうか。自分にされたくないことを人に対して行なわない、というのがそれだ。